



いもの 鋳物職人

柏木照之(柏木美術鋳物研究所)



神奈川県小田原市

vol.2

たった一音で空間が様変わりし、感動を呼ぶ。

使い込むほど音が鳴り上がる砂張さはり

鋳物とは溶かした金属を型に流し込み、冷えて固まった後、型から取り出して作った金属製品。鋳物に使う金属には、鉄・銅合金・軽合金(アルミニウム等)があります。砂張とは、銅合金の一種で、銅に錫(すず)を20%以上含ませたもの。錫が多く含まれる砂張は、硬くて脆いことから製造には高度な技術が必要とされ、全国でも製造されている箇所は少ない。砂張の特徴は、繊細な音色がいつまでも続く余韻。また、使い込むほど音が鳴り上がる(音が良くなる)と言われ、古来から珍重されています。



洋館にも和風住宅にも合う砂張製のドアベル

鳴り物にこだわり、代々受け継がれてきた柏木家の伝統

室町時代、北条家の関東進出にともない小田原鋳物が始まったとされています。その伝統工芸を受け継ぐのは、柏木美術鋳物研究所を営む柏木家のみ。柏木家が得意としていたのは鳴り物。その技術は、若き鋳物職人の柏木照之さんに伝承されています。工房の一角には、街かど博物館「砂張ギャラリー」(入場無料)が併設され、作品展示ばかりではなく、工場直売も行っています。



風鈴、仏具のお鈴、シンバル等、街かど博物館「砂張ギャラリー」には、様々な鳴り物が展示されている

黒澤明との深い関係

三船敏郎主演の映画「赤ひげ」(1965年)で、100個の風鈴が鳴り響く印象的なシーン。この風鈴は柏木美術鋳物研究所で制作された砂張製の風鈴です。当初は、違う風鈴が予定されていましたが「最高の風鈴を持ってこい!」という黒澤明監督の指示のもと、最終的に選ばれたといういきさつがあったようです。

多彩な伝統工芸が息づいている小田原

名君の誉れ高い北条家は、諸国の武将が骨肉争う戦国時代にあって親子兄弟が争うことなく北条五代(早雲・氏綱・氏康・氏政・氏直)約100年の間も続き、文化面でも大きく貢献しました。木片を組み合わせる幾何学文様を作りだしていく箱根寄木細工。美しい木目を活かした小田原漆器など、小田原市にはいろんなジャンルの伝統工芸が今も息づいています。



箱根寄木細工(上)
小田原漆器(下)

垣根を越えて結びつく街

伝統工芸に携わる職人がコラボして新たな小田原スタイルを確立する取組みも行われています。市松模様の寄木細工の取っ手がついたお洒落な卓上ベル。



炎が燃えたぎる作業現場から、あの繊細な音色がつけられるとは、とても想像がつかない……

金属の溶ける独特の香りが周囲に漂い、炉の中で炎が燃えたぎる作業現場は緊張感を強いられる。そして、炉で溶かされた金属を鋳型に注ぐ「吹き(湯入れ)」の工程で、その緊張感はピークに高まっていく。いつけん荒々しく感じるこの作業風景から、余韻がいつまでも続く、砂張の繊細な音色がつけられるとは、驚かされる。「夏は、炉のまわりは何度まであがりますか?」と聞くと、柏木さん、「知ってしまうと嫌になりそうで、測った事はないんです。(笑)」



音の好みは人それぞれだから、とても奥深いです

音は、年齢に応じた好みがあったり、その日の体調で音の好みが変わるもので、こんなに奥深いものだと思わなかった、と話す柏木さん。できればネット上で自社製品の音を聴き比べてもらいたいが、スピーカー越しで、本当に伝えたい音が伝わるかが不安……。でも、ドラマで仏壇のお鈴が鳴ったりする場面があると、つい反応してしまうんですね(笑)



音に敏感な柏木さんはカメラのシャッター音にも思わず反応してしまう(笑)

先達者と対話する手掛かりとは?

今となっては、まわりに教わる人がいないなか、残された昔の鋳型から教わる人が多いと柏木さんは言う。「でも、亡くなったおじいさんとは、話しがしてみたい。今の自分の仕事をどう見るのか、とても興味がありますね。」鳴り物にこだわる柏木家の伝統は、残された手掛かりをたどって、次世代につながっていく。



祖父の代がつくった精巧な鋳物製品